公益社団法人国際演劇協会（ITI/ユネスコ）日本センターは、ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会ITI（International Theatre Institute）加盟の公認団体です。ITIは世界平和と相互理解の促進を希求するユネスコ憲章の精神に基き、演劇による国際交流の増進を目的として1948に年創設され、現在約90の国と地域が加盟しています。

公益社団法人 国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センター
Japanese Centre of International Theatre Institute / UNESCO

I.T.I.

I.T.I.NEWS 2019.1.31. No.130

「演劇は魂の叫びだ」

ＩＴＩ国際演劇協会創設70周年記念世界大会2018で
ロシアの演出家アナトーリー・ワシーリエフ氏が表明

年号が改まる年、会員の皆様も新たな一歩を歩みだされたことでしょう。

年初にあたり、穏やかで平和な暮らしが世界の人々にもたらされるよう祈らずにはいられません。

ＩＴＩ・ＪＡＰＡＮは「紛争地域から生まれた演劇」のリーディング公演で昨年末の仕事を終えました。予算が乏しい中、小さなスペースで始めた試みでしたが、心ある人々の共感を得て今回はチケットがソールド・アウト、私は稽古の回を見てくださいと事務局からいわれるほどの盛況でした。

このリーディングがきっかけとなってさいたま芸術劇場が本公演にしてくださったこと、また、「世界の今を問う演劇」としてメディアに注目されたことも嬉しいことでした。

パレスティナで、イスラエルで、パキスタンで、シリアで、そしてアフリカで紛争に苦しむ人々がいます。演劇はその叫びを遥か遠くの国々にも伝えることができるのです。

ＩＴＩ70周年を迎え中国の海南省で開かれた世界大会でロシアの演出家アナトーリー・ワシーリエフ氏が「演劇は魂の叫びだ！」と表したように、日本の私たちもその訴えを受け止め多くの方々に伝えたいと思います。本年も会員の皆さまがＩＴＩの活動に一人でも多くご参加下さいますように。

公益社団法人　国際演劇協会
日本センター（ITI/UNESCO）
会長　永井　多恵子

ITIウガンダセンター
パンフレットの表紙から

ウガンダセンター会長ジェシカ・カーフワ女史が本誌に寄稿 3面

東アフリカの内陸国・ウガンダ共和国は1962年にイギリスから独立して英連邦に加盟。クーデターを繰り返しながら96年に大統領・国会議員選挙が行われ、現ムセベニ大統領の長期政権が成立しました。

ＩＴＩ世界大会で、ウガンダセンター会長のジェシカ・アトウォーキ・カーフワ Jessica Atwooki Kaahwa 女史はウガンダ演劇の受難の歴史を語りました。シェイクスピアを信奉する〝植民者〟たちによる西欧演劇の強制は、独立後の70年代まで続いたといいます。ウガンダのＩＴＩ加盟は1976年。しかし、加盟と同時に登録抹消。ウガンダの名優であり国立劇場の劇作家・演出家のバイロン・カワドゥワ Byron Kawadwa 氏が政治批判劇を書き、当時のアミン大統領側近に殺害されたためです。

この強圧とＳＲＢ（国家調査局）の監視下、近隣諸国への亡命が相次ぐ中、国内に踏みとどまった俳優、舞台美術家、テクニカル・スタッフ、研究者たちが今日のウガンダ演劇の基礎を築くことになりました。

ウガンダがＩＴＩに再度加盟を果たしたのは登録抹消から10年後の1986年のことでした。ジャクソン・ンダウラ Jackson Ndawula 会長のもとで活動を続け、2015年1月15日からジェシカ・カーフワ女史が現会長職を担っています。

平和・対話・創造力 ユネスコの初心を体現

中国・海南島でＩＴＩ70周年記念祝典

ＩＴＩ国際演劇協会70周年記念祝典と世界大会は、２０１８年11月23日から26日まで中国・海南省海口市に50余の国と地域から４４０人が参集して盛大に行われました。

ユネスコ事務局長補佐の曲星（チュウシン）氏は、演劇こそユネスコ創設の初心である「平和・対話・創造力」を体現する最も有力な手段と高く評価、国境・人種・宗教の壁を越えて国際交流と共同事業を積み重ねたＩＴＩ70年の歴史に祝辞を寄せました。

トビアス・ビアンコーネ事務総長は、人類はこの70年間に幾多の紛争を経験し、悲惨の記憶を重ねてきたが、ＩＴＩの仲間は創設の初心を忘れることなく、芸術が社会と個々人に生きる力を与え続けてきたことに確信を持とうと強調し、「世界はＩＴＩを必要とし、ＩＴＩは文化と舞台芸術（パフォーミング・アーツ）が集う世界を必要としている」と訴えて会場の共感を誘いました。

ムハンマド・サイフ・アル＝アフハーム会長はＩＴＩと舞台芸術の発展に貢献した各界の人士に敬意と感謝の念を表し、「名誉会長賞」、「優秀芸術家賞」、「ワールド・シアターデイ　インターナショナル・ダンスデイ　メッセージオーサー賞」、「名誉会員賞」の受賞者全員を親しく壇上に招き上げました。

世界はＩＴＩを必要とし、ＩＴＩが必要とするのは文化と演劇が重んじられる世界です――トビアス・ビアンコーネＩＴＩ国際本部事務総長

ITI「名誉会員賞」を受賞した日本センター理事の小田切洋子氏

日本センター・小田切洋子氏に「名誉会員賞」

「名誉会長賞」はマンフレート・バイハーツ（ドイツ）、ラメンデュ・マジュムダ（バングラデシュ）、金正鈺（キムジョンオク）（韓国）の会長経験者３氏、「優秀芸術家賞」はパントマイム俳優のラジム・ヴィズヴァーリ（チェコ）、昆劇俳優の張軍、京劇俳優の裴艶玲（はいえんれい）、演出家で教育者のカルロス・セルドラン（フィリピン）の４氏、「ワールド・シアターデイ　インターナショナル・ダンスデイ　メッセージオーサー賞」３氏のうちジェシカ・アトウォーキ・カーフワ氏（ウガンダ）は「紛争地域の演劇」をテーマとする「研究討論」の司会を担当、日本センターの求めに応じて討論の概要を寄稿いただきました。「紛争地域から生まれた演劇」が昨年10回目を迎えた日本センター（関係記事11面）にとって、ウガンダからの報告には興味深いものがあります。

「名誉会員賞」10氏のうち唯一の日本人は小田切洋子日本センター理事でした。

日本センターからの参加者は永井多恵子会長、小田切洋子理事、菱沼彬晁理事、小池雅代会員、角本敦会員、宗重博之会員の６氏。

今号ではテーマ別に行われた研究討論①「紛争地区のパフォーミング・アーツ」の司会者ジェシカ・カーフワ氏、②「中国における社区＝新コミュニティーの形成とパフォーミング・アーツ」の司会者・宋宝珍氏（中国芸術研究院話劇研究所所長）、③海南島に伝わる瓊劇（けいげき）や陝西省の秦腔（しんこう）ほか、茶道、書道、太極拳など中国伝統技芸のワークショップは宗重博之氏にそれぞれ概括報告を依頼しました。

（報告　理事・菱沼彬晁、撮影＝小池雅代）

演劇の紛争介入と状況認識の共有化

①「紛争地域の演劇」ウガンダセンターの立脚点

司会と概括報告
ジェシカ・カーフワ
（ウガンダセンター会長）

紛争はこの世の常ですが、それが統制が利かなくなって拡散するときに問題となります。フリードリヒ・グラスル（1941年ウィーン生まれのエコノミスト、組織コンサルタント、紛争研究者）の理論モデルを当てはめると、紛争の当事者が今は自分たちが紛争のどの段階にいて、演劇がどのようにそれに関われるかを考えるのに役立ちます。そのモデルは、仕事や街中での争い、家庭内の戦い、相続、戦争など、すべての紛争に適用できるのです。

対話をうながす演劇の介入（訳者注：問題を解決するために演劇の手法を応用する活動のことをいう。以下同じ）をスムーズに行うためにフリードリヒ・グラスルによる紛争の拡大の9つのフェイズ（段階）という考え方を応用します。

戦いは双方勝利から双方敗北へ

発砲⇩差異・矛盾・分裂・暴力・戦争・停戦・合意・正常化・和解⇩対話

差異から分裂までのフェイズは、ウィン＝ウィン（両方ともが勝利する）の関係と考えられています。ここでは演劇の介入は対話に焦点を当てます。暴力から停戦までは、ウィン＝ルーズ（一方が勝者で一方が敗者）、そして、合意から和解まではルーズ＝ルーズの関係（両方ともが敗北する）です。

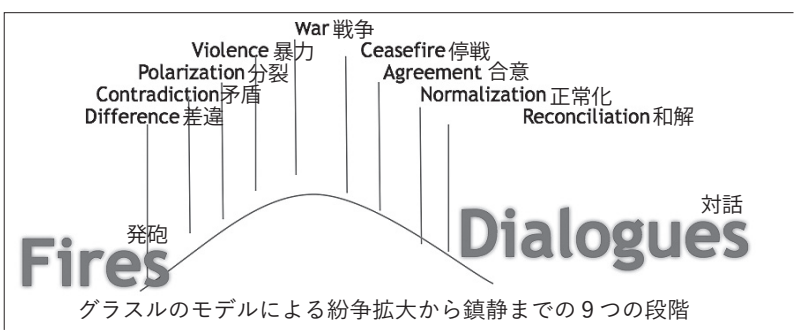
紛争状況を扱うにあたって、たとえ当事者間の言語や文化や地理的な位置に共通点があるとしても、共有されるべき前提は何かを、常にそれぞれのコンテクスト（歴史的背景や社会状況に関する認識のあり方。以下同じ）に沿って評価する必要があるとウガンダITIセンターでは信じています。コンテクストを共有することは、狙いを絞ったコミュニケーションのために重要であり、時間の効率や行動のスケールを向上させます。

それだけではなく、プロセス重視アプローチのためには時間が限られているので、コンテクストを共有することが実践と結果を出すために重要な意味を持ちます。わかりやすくいうと、たとえば紛争の3つの段階、すなわち、紛争以前、紛争の最中、そして紛争後に演劇的な介入を行う場合に、グラスルのモデルは、紛争の拡大と鎮静、そして差異・矛盾・分裂・暴力が拡大して戦争に至り、次に停戦・合意・正常化・和解に至る鎮静の間のフェイズについての古典的な見本を示しています。

「被抑圧者の演劇」の対話術

これらの場合の演劇による介入は、すべての人々に問題への参加を促し、「被抑圧者の演劇」（ブラジル出身の演出家アウグスト・ボアールが提唱・実践する演劇のあり方、手法。すべての人が問題を自分で考え、解決に向けて行動するために演劇の手法を応用するもの）」の対話術である「立ち止まって、また始める」技術を活用することによって、紛争のきっか

Conference
Round Table Discussions
研究討論



グラスルのモデルによる紛争拡大から鎮静までの９つの段階

けとなる要素をうまく回避し緊張を緩めようとします。そして、その行為によって状況の分析、批判的な参加、適切な介入を促します。つまり、このタイプの演劇の介入は紛争のフェイズによってさまざまな形をとります。

コミュニティ・イベントと参加の演劇

しかしながら、重要なことは、これまで馴染み深かったものを再考し変更することで物の見方や争点の論じ方の新しい方法を創造し、介入を行うことです。これは、コミュニティ・イベントの参加者が参加の演劇を通してお互いにアイデアを共有し、共通の場所、つながり、そしてそのコミュニティの現在と未来に関する共通の関心を位置づけ、対話への批判的な参加を行うことによって達成されるものです（出典：bell hooks, *Teaching to Transgress: Education as the Practice of Freedom*,Routedge 1994, pp.130）

コミュニティはどのような設定のものでもありえます。たとえば、国内で居場所をなくした人たちの集う避難キャンプ、難民キャンプ、移動キャンプ、暴徒の襲撃の恐怖に襲われている村、誘拐された人たちのリハビリテーションセンター、軍隊に制圧された市、ギャングのテロにあった街路、都心での人種分断、市場、学校でのスト、などです。

これらの多様なコミュニティにおいても、そこにいる人たちの中で力のある人、優遇される人、周辺に追いやられる人というように、それぞれ異なったロケーション（コミュニティ内での特定の立場）を持っていることが考慮されなければなりません。

『私の財産、私のルール』の舞台

イヨネスコ作『授業』の舞台

コミュニティはどのような設定のものでもありえます。国内で居場所をなくした人たちの集う避難キャンプ、暴徒の襲撃の恐怖に襲われている村、誘拐された人たちのリハビリテーションセンター、軍隊に制圧された市、ギャングのテロにあった街路……

ファシリテーターの役割

したがって、対話を促すファシリテーター（助言・進行役）が参加者の間のロケーションの差異を理解し深く知覚することが、意味のある対話を生み出し、グループに参加する合意を形成するために重要なのです。これらの真実は、参加型演劇のプロセスにおけるコミュニティ・イベントの計画や実施において無視されてはなりません。前述のように、参加型演劇のプロセスが積極的な参加の前提となります。

一般的に参加型演劇の上演ではプロセスの柔軟性を強調しており、それによって多様な紛争地域での実践が可能になっています。この文章の考察が、このような実践をジョークだと冷笑する人々を啓蒙することに貢献し、多様なコンテクストの間で共通認識が形成されてものごとが理解しやすくなることを期待します。文章を書くことは、人間の共存のためのコミュニケーションツールとしての演劇を信ずる人たちや、参加の実践を豊かにすることを探求する人たちをそこに招待することであり、そのような行為を奨励することです。

演劇と社会人類学的アプローチ

実際には、戦略の選択は、紛争に関して当事者がどのような見通しを持っているかという視点から熟慮を加えた上で、ほぼそのコンテクストに沿って決定されます。トラウマ（心的外傷）を抱えたコミュニティに対して、社会人類学的アプローチは欠かせないもので

す。そこには、コンテクストを共有するコミュニティの社会政治的な背景の調査と文化交流も含まれます。

問題となっているコミュニティがまったく問題を抱えていないように見えても、そのことで、「ひとつの絵画は千の言葉に匹敵する」という考えが否定されるわけではありません。演劇は、身体の中の目に見えない人間の心の揺れを視覚化するものなので、現に激しい紛争の中にいるか、これまでその中にいた人たちの、そうでなければ見えてこない感情をドラマにすることが容易にできます。それゆえ、（参加型演劇の）演じる部分は非常に自由度の高い演劇なのです。このように理解すると、たとえ、そのコミュニティがよそよそしくて面白みに欠けるとしても、演劇がそこに介入することで面白く手応えがあるものになります。紛争と紛争の変容に関して速く深く理解するために、派手で視覚的に強いインパクトを持つ演劇のプロセスに参加することは常に価値のある選択としてあり続けます。

ギャング団とのコミュニケーション

さらに、十分な検証を経たこの応用演劇のプロセスの実践者である皆さんはよくご存知でしょう。特定の地域では別のコミュニケーション技術を応用することが身近に起こります。ある地方の路上の紛争で話されるスラング（俗語・隠語）の場合、関係者やギャング団と親しく仕事をすることが必要になります。彼らは自己防衛のために隠れ家では仲間内でしかわからない言葉を使います。外部の人間は招待されなければ入り込んで行けません。演劇のファシリテーターがやっているのは、この「入り込んで行く」ということです。最悪のシナリオの場合でもたいてい話のわかるギャングはいるので、彼らに認めてもらわなければなりません。彼らは、一度あなたの真剣さを理解すると、グループの生存のためにこれまで仲間内だけに閉じられてきた言語の世界にあなたを招き入れ始めます。演劇人はこのことに興味を持つはずなのですが、持っているすべての技術を使って周到に準備をしていても、必ずスラングの使い方を間違えて恥をかくことになります。しかし、時が経つと、継続によってあなたは彼らの信頼を得て、彼らの仲間の一人としてコミュニケーションができるようになります。

そのときには、参加型演劇のプロセスで実践するドラマの主題がグループの行動に関する議論を高揚させ、敵対心が低くなることで、そこから組織としての解決策が現れ始めます。これは、紛争における同じような複雑な状況にも当てはまります。そこでは、争い合う部族が同じ場所に招き入れられ、安全な場所に移されます。

部族間の敵対意識が低下するとき

私は、これを２００３年にウガンダの最も古い避難キャンプの一つであるキャングワリ難民居住地で目撃しました。私がキャンプに着いたときは、部族の違いに基づく内部の暴力紛争が起こったばかりで、数千人がシェルターから外に溢れていました。

他方、コンゴ民主共和国（ＤＲＣ）から来た主要な部族の間に激しい紛争がありました。コンゴ民主共和国東部のヘマ族とレンドゥ族です。彼らは、社会文化的に相違があり、平和な時には互いのことを忌避していたのですが、難民キャンプに保護され、逃れようもなく一緒に暮らすことになりました。私がキャンプを訪ねたときの受け入れ元になってくれたのはコンゴ人だったので、私はコンゴ民主共和国から来た難民たちと一緒に演劇（による介入）を始めることに決めました。私は、多くの紛争地域に関わって仕事を始めました。そこで、人々の立場、歴史、紛争の現状に関する彼らの考えを取り入れることを演劇活動の成功の前提とすることを学んだのです。

（訳＝理事・曽田修司）

アチョリ族の和解の儀式（訳者とカーフワ氏の往復書簡から）「応用演劇」の実践は、状況に関連した馴染みのある言葉を用いることで素晴らしい成果が上がります。演劇による介入の目的は、紛争を停戦、合意、正常化、和解に変えていくことです。このことは非常に重要です。たとえば、アフリカのものの見方でいうと、私たちはドラマティックな悲劇を楽しむことをしません。なぜなら、アフリカは共同体的な社会であり、いかにそれが悲劇的に見えるとしても、問題点に対してはそれを緩和するすべを発見するからです。ウガンダでは、自分たち独自の和解システム、すなわちアチョリ族のコミュニティで「マタプット」と呼ばれる和解の儀式（供物の交換と苦いハーブを飲む儀式）による内的な和解のシステムを発展させてきたのです。

中国の新コミュニティー「社区」

②社区の形成とパフォーミング・アーツ

丸抱えという帰属意識では新時代の地域生活が営めなくなってきたからです。欧米のコミュニティーや日本の町内会や団地とも違う中国特有の住民組織で、最終的な目標は住民の自発的な参加による民主的自治を実現することとされ、新しい市民生活と市民意識が育ちつつあるといわれています。（編集部）

司会と概括報告
宋（そう）　宝珍（ほうちん）
（中国芸術研究院
話劇研究所所長）

中国の大都市に「社区」と呼ばれる新しい地域社会、コミュニティーが生まれています。市場経済の発達に伴って民間企業や外国企業の急成長、農村からの流動人口の増大によって、これまでの国有企業持った住民が集まって自己表現の場を持ち、地域住民に開放された中国独特の演劇活動ということができます。

新コミュニティー演劇の種々相

宋宝珍　今年、ＩＴＩは創設70周年の節目を迎えました。「人生七十古来稀なり」という諺がありますが、人類がたどってきた演劇の歴史からすると、ほんの一瞬のできごとに過ぎません。孔子は「七十にして心の欲する所に従って矩を踰えず」と言いました。ＩＴＩ70周年は、私たちにまたとないめぐり合わせの場を提供してくれたのです。

「社区の形成とパフォーミング・アーツ」とテーマも今日にふさわしいものがありますが、一口にコミュニティーといっても、中国と西側世界では考え方が異なり、その中で演劇の果たすべき役割は必ずしも同日には論じられませんが、中国では階層的分化が固定化に至っておらず、新しい市民意識を

地域に開放された演劇活動

宮宝栄（きゅうほうえい）（上海戯劇学院教授）　上海は中国最先端の現代都市です。現代話劇発祥の地でもあり上海市の中心部・静安区の華山路一帯は上海戯劇学院、上海話劇芸術センター、中国福利基金会児童芸術劇院が指呼（しこ）の間（かん）にあって、さながら「戯劇大路（ロードウエー）」の活況を呈し、若い観客の育成にも務めてきました。観劇は彼らの血肉となり、生活の一部となっています。

上海の「下河迷倉（２００４年倉庫を改造し、民間の非営利型演劇活動に提供された小劇場。７年後に閉鎖）」や「現代戯劇谷（静安区に設立され、区政府のサポートも受けて活動を活発化させている）」といった劇場空間に若者集団や民間カンパニーが集まり、実験劇、前衛劇の火を灯して来ました。

「社区演劇」というと、欧米ではある特定の社会階層や集団が創作し上演する演劇、たとえば身体や知的ハンディを持った人、あるいは移民や難民、貧困層の演劇といったイメージを持たれるかもしれませんが、中国では階層的分化が固定化に至っておらず、新しい市民意識を持った住民が集まって自己表現の場を持ち、地域住民に開放された中国独特の演劇活動ということができます。

演劇で文化都市空間を共有

胡志毅（こしき）（浙江大学教授）　浙江省の演劇活動は近年、喜ばしい進展を遂げています。省都・杭州では若い劇団の旗揚げが相次ぎ、たとえば「風馬劇場」がその場を提供しています。大学のキャンパス演劇も盛んで、私の浙江大学では「黒白劇社」が活発な公演活動を続け、地域の支持を得ています。

私は中国話劇理論と演劇史研究会を主宰しており、ここで皆さんにご紹介したいのは、私たちが長年「華文（中国語）演劇祭」を香港、マカオ、台湾とも連携しながら長年実施していることです。演劇と都市空間の発展を研究するのが眼目で、この空間は物理的なものではなく、文化的なものです。

演劇とアイデンティティーの確立

鄧菡斌（ていかんひん）（海南大学副教授）　演劇と新コミュニティーを考える場合、強調したいのは演劇におけるカタルシス効果です。これは浄化であり、排毒（デトックス）であり、昇華です。今の時代は力と力のぶつかり合いで、持論、正論を真っ向から一方的にまくし立てるだけではコミュニティーは一つ

にまとまりません。結婚に喩えるなら、「愛情」という大義、建前とは裏腹に家庭の危機は毎日のように起こっているのですから。

２０１５年に私は実際に「結婚」をテーマに観客参加式の作品を上演しました。私は集まった観客に、劇が始まる前にまず「結婚」するようにと申し渡しました。たとえその観客が結婚していようと、していまいと、この儀式を強要しました。相手は同性でも異性でも、一人でも同時に多数でも、知り合いでも赤の他人でもかまいません。言っておきますが、この作品は俗悪な喜劇ではありませんよ。シリアスなドラマです。この〝無茶ぶり〟は世間的には「悪の勧め」ですが、参加者は世間的縛(しば)めから解き放たれて一種の娯楽作品的な〝乗り〟を見せていました。観客を参加させることで彼らに考えるきっかけを提供しましたが、結論は求めずにカタルシス、排毒効果だけを与えたのです。「聖なるもの」と「俗なるもの」の弁証法的合一、まさにこれが演劇の持つ強みなのです。

ここから第二の問題が引き出されます。あるコミュニティーに属している自分は何者なのか。自分のアイデンティティーはどこにあるかという問題です。たとえばこの中国に住む自分は何者か。日ごとに富強を誇るこの国でどんな「自己同一性」が求められているのか？　中国の伝統的価値観からすれば、あなたの長所と短所は、自分という一本の木にまるで〝別人格〟の藤蔓のように絡まっているとみなされます。そうでしょうか？　ここにロシアの劇作家が恰好なお手本を見せてくれます。チェーホフの『ワーニャ伯父さん』です。登場人物はそれぞれに不完全で欠点だらけです。しかし、その同じ人物が同時にあまりにも真っ直ぐ、あまりにも熱い愛情の持ち主でもあるからです。

私たちはこの作品からどんな精神性を導き出し、体現することができるでしょうか？　演劇は神秘的な方法をたくさん持っていますが、演劇人はその秘密を明かしてくれません。その人間的魅力、発散されるエネルギー、オーラの正体は一体、何でしょうか？　たとえ、友人の科学者の力を借り、脳神経学、人工知能などをフル動員してでも、この神秘の領域を解き明かしたいと願っています。

演劇大学と出稼ぎ村の子どもたち

沈培蕓(しんばいうん)（中央戯劇学院教授）

新コミュニティーの芸術活動を考えるとき、広場で行われるダンスの集いも無視できません。都市の大小を問わず郷村の広場に至るまで、住民が夕方になると広場や空き地にいそいそと集まってダンスを始めます。その表情は幸せと喜びに満ちあふれています。「なぜ踊るのですか」という問いに、健康のため、娯楽のため、美容のためとさまざまな答えが返ってきます。

中央戯劇学院舞踊系の教師、学生は「留守児童」のために広場のダンスを作りました。留守児童とは両親の多くが都市で出稼ぎ仕事をし、家にとり残されている子どもたちです。中には麻薬に手を染めて服役している親もありました。私たちは僻地の村に入り、その日常を取材して舞踊劇にまとめました。子どもたちと寝食を共にして舞踊やさまざまな身体表現を教え、広場で一緒に踊ったのです。子どもたちが自分を見つめながら命を大切にし、生きる希望を持ってもらうことが何よりの願いでした。

宋宝珍　ここで提起された新コミュニティーの演劇とは、次の四つに大別されるのではないでしょうか。

一、住民の居住空間を活動範囲とする演劇。

二、住民の自発的な創造活動と住民に奉仕する表現活動。

三、特定の社会的階層、集団に照準を合わせた演劇活動。

四、地域の劇場や劇団を核として形成する演劇文化の全体的生態系。

（訳＝菱沼彬晁）

ITI70 周年記念祝典に参加した日本センター訪中団　左から角本敦、菱沼彬晁、小池雅代、小田切洋子、永井多恵子、宗重博之、永井達也の各氏

③中国伝統芸能ワークショップ「昆劇と秦腔　対照的な劇的世界」

報　告
宗重　博之
（演劇プロデューサー・劇団黒テント・壁なき演劇センター所属）

11月25日、海南大学で行われたワークショップは、午前と午後の部に分かれ、それぞれ1～2時間の枠の中で開催されました。興味深かったのは、2人の芸術家による中国の伝統演劇「昆劇（こんげき）」と「秦腔（しんこう）」のワークショップでした。

映像による名場面の解説、基本所作の実演、セリフ廻し、参加者の実体験などがその場で行なわれました。

なるほど、中国の伝統演劇は、その本質において地方劇であることを実感し、また、そのルーツは、現代においてなお豊かな生命力を保っていることを痛感しました。さらに、伝承を重んじながらも、常に革新に取り組もうとしている姿が印象的でした。

パンフレットによると、昆劇のワークショップを担当した芸術家林為林（リンウェイリン）氏は、中国の演劇人最高の栄誉とされる「梅花賞」を2度受賞し、「中国伝統劇の育ての親」として知られています。昆劇は繊細優美な詩と音楽、そして演劇を融合させた古典劇で、長江下流の現蘇州市東部で始まったとのこと。600年の歴史を持ち、中国演劇の形式すべてに深く影響を与えています。もう一人は、秦腔の斉愛雲（チィアイユン）さん。この人も梅花賞の受賞者です。高く突き抜ける声が響き、長い袖が華麗に舞い、かつユーモアを持った躍動美が魅力的でした。秦腔は、中国の西北部・陝西（せんせい）省、甘粛（かんしゅく）省の黄河流域に秦の時代から始まったとのこと。中国文明の発祥地で育まれ、2千年以上の歴史を持つということです。

「剛毅さと悲愴美をたたえた曲調」が秦腔の特徴といわれ、昆劇とは対照的な劇的世界を感じました。

午後の部では、民族芸能のバンブーダンス、書道と墨絵、古琴の演奏、太極拳、中国式茶道のワークショップが行われました。

中国ではバンブーダンスを「竹竿舞（ちくかんぶ）」と呼んでいます。黎（リー）族の民族衣装に身を包んだ若い女性たちが両手に持った竹竿をリズミカルに動かし、踊り手はそれを上手にかわしながらステップを踏みます。見学者たちも踊り手に交じって初めての体験をしました。

中国式茶道は、茶葉の使い方に特徴があり、同じ茶葉を使って、最初の味、次の味と味の変化を楽しみました。湯呑はとても小さく、入れていただいたお茶はひと口で飲み干すほどの量でした。今回のワークショップは極めて刺激的であり、中国の伝統演劇への関心を、より一層深めさせてくれました。（在ベトナム・ハノイ）

かつて「天地の果て」と呼ばれた流刑の島、1930年代には解放軍の少女戦士がその名を轟かせ「革命模範劇」の舞台となった海南島。今は「中国のハワイ」ともてはやされる観光リゾート、中国最大の経済特区へと変身です。

秦腔の名女優・斉愛雲氏（右）　浙江昆劇団団長林為林氏を講師に　黎族の竹竿舞（バンブーダンス）

■ ITI 日本センター　2018 年の活動紹介①

写真左から　かとうかず子、根岸季衣、床嶋佳子、西山水木、高橋紀恵、原日出子
撮影＝谷古宇正彦

『この子たちの夏 1945・ヒロシマ　ナガサキ』

世田谷パブリックシアターで

8月4日と5日、世田谷パブリックシアターで『この子たちの夏1945・ヒロシマ　ナガサキ』の上演を行いました。本作は1945年8月に広島や長崎で原子爆弾にあった子どもたちとその母たちの残した手記や詩歌、母親を原爆によって失った子供たちの手記等を女優と地域参加者が読む朗読劇で、1985年の初演以来、全国で811回におよぶ上演を続けてきました。

来日したマリゴールド・ヒューズ氏

当センターは2011年から東京公演を主催し、翌12年からは英語の同時通訳機を無料で提供。東京滞在の外国人や、海外にも観客を増やしています。

日英のプロデューサーが対談

今年はロンドンから演劇プロデューサーのマリゴールド・ヒューズ氏を招き、トークと市村作知雄（「フェスティバル／トーキョー18」エグゼクティブ・ディレクター）氏との対談を行って本作の国際的意義を再認識。内容はセンターホームページ（http://iti-japan.or.jp/summer_talk2018/）に掲載しています。

ヒューズ氏は広島とイギリスで、市井の人々のオーラル・ヒストリーにより子どもたちに戦争を語り継ぐ演劇作品を手がけています。今回の来日でヒューズ氏は広島も訪問し、広島の子どもたちと一緒に創った『ヒロシマの孫たち』の稽古と公演に立ち会いました。

構成・演出　木村光一
出演　かとうかず子、高橋紀恵、床嶋佳子、西山水木、根岸季衣、原日出子
短歌・俳句の朗読：髙安智実　都内在学の中・高校生
提携：公益財団法人　せたがや文化財団　世田谷パブリックシアター
後援：世田谷区／世田谷区教育委員会
制作：地人会新社、国際演劇協会日本センター
協力：NPO 法人子どもコミュニティネットひろしま、小笠原由季恵、秋葉よりえ
平成30年度競輪の補助事業（親と子のふれあい交流活動補助事業）

高校生や学生のための観劇・劇評応援プロジェクト

同世代の観客の交流の場に講師を招き、観劇後に語り合う――「観劇カフェ」は、これまでの「高校生劇評グランプリ」受賞メンバーで構成されたNeSTA（Next-generation STAGE Alliance）に参加している現役の学生が運営に携わりました。

▽第1回『BOAT』講師＝徳永京子さん（演劇ジャーナリスト）
▽第2回『八月納涼歌舞伎』講師＝田中綾乃さん（三重大学人文学部准教授・演劇評論家）
▽第3回『贋作 桜の森の満開の下』講師＝嶋田直哉さん（明治大学准教授）
▽第4回『チルドレン』講師＝小田島恒志さん（早稲田大学文学学術院教授、翻訳家）

また、演劇人インタビューとして、プロデューサーの後藤まどかさん、舞踊・演劇評論家の桂真菜さんにもNeSTAメンバーがインタビューを行い、NeSTAホームページにレポートが掲載されています。

■年々盛況　ITI日本センターの独自2大プロジェクト

「国際演劇年鑑」刊行を軸に同時代演劇にズーム・イン

日本センターは1972年から「国際演劇年鑑」の発行を続けています。この関連企画として実施しているのが、（主に同時代の）海外戯曲を紹介する「紛争地域から生まれた演劇」シリーズと、年鑑執筆者によるレクチャーシリーズ「ワールド・シアター・レポート」です。この二つのイベントは、当年鑑をより多くの方に知っていただく機会ともなっています。

■ITI日本センター　2018年の活動紹介②

ユネスコ創設の初心を受け継ぐ「紛争地域から生まれた演劇」

今年10回目を迎える「紛争地域から生まれた演劇」。ITIスーダンセンターとドイツセンターが共同で始めたITI本部の試み「紛争地域の演劇（Theatre in Conflict Zones）」に由来する日本センターの独自プロジェクトです。

ドイツセンター・エンゲル氏招いて10周年の記念レクチャー

昨年11月、ドイツセンターからエグゼクティブ・ディレクターのトーマス・エンゲル氏を招いて二つのレクチャーを行いました。エンゲル氏は、スーダンセンターのアリー・マフディ・ヌーリー氏（2015年来日）らと「紛争地域の演劇」を立ち上げた人物で、17日、「演劇と紛争――国際演劇協会ドイツセンターの活動から――」と題して「紛争地域の演劇」について語りました。話題は79年にハンブルクで創始されたドイツ初の国際演劇祭「諸国民演劇祭」（現在の「テアター・デア・ヴェルト」）にも及び、質疑も充実して、あっという間の3時間でした。

司会＝新野守広氏、通訳＝萬代倫子氏、会場＝ゲーテ・インスティトゥート（東京ドイツ文化センター）ホール、協力＝ゲーテ・インスティトゥート（東京ドイツ文化センター）

20日は「ITIドイツセンターの活動とITI World Wideの動静について」と題してドイツセンターの活動と運営方法を語り、会員や関係諸団体の方々にもご来場いただきました。ITIのモデルケースを共有し、ユネスコとITIの関わりを再認識し、当センターの将来を考える良い機会となりました。

司会＝曽田修司常務理事・事務局長、通訳＝三輪えり花理事、会場＝国立能楽堂大講義室

執筆者を訪ね、世界に触れる「ワールド・シアター・レポート」

「国際演劇年鑑」の日本語版では毎年、二十前後の国・地域の舞台芸術について、専門家の方々にご寄稿をいただいています。編集を進める中で、誌面に収まりきらない話をもっと届けたいという想いが募り、「執筆者に会いに行く」というコンセプトで始めたのが当シリーズです。今年度は2回実施し、いずれも盛況となりました。

7月4日には、スウェーデンの演劇事情について、ストックホルム在住の俳優、小牧游氏（劇団民藝所属）にお話しいただきました（会場＝ぎゃらりいたねから）。

小牧さんは日本センターの会員でもあり、年鑑には02年からご寄稿いただいています。文化行政や俳優のあり方、#Me Too運動に対する劇場、演劇人の応答などについて、客席との会話を交えながら、小気味よい語り口でたっぷりご紹介いただきました。

10月6日には、中国の演劇事情について、田村容子氏（金城学院大学文学部教授＝中国近現代演劇）にお話しいただきました（会場は三軒茶屋キャロットタワー2階・八角堂、共催＝世田谷パブリックシアター）。

昨年度の年鑑からご寄稿いただいている田村氏は、小劇場から大劇場、演劇祭まで、幅広くリサーチを行っており、新鮮な話をたくさん聞くことができました。なお、このレクチャーは、世田谷パブリックシアターでの『風をおこした男――田漢伝』（原題は『狂飆』）公演初日に合わせて開催しました。本作についても、昨年度の年鑑に田村氏の詳述が掲載されています。

新年度の年鑑もお楽しみに。

（報告＝事務局・後藤絢子）

■ ITI 日本センター　2018 年の活動紹介③

ユネスコ精神を体現「紛争地域から生まれた演劇」

2009 年から始まった「紛争地域から生まれた演劇」シリーズは、「国際演劇年鑑」の調査研究事業の一環として定着。ユネスコ創設の初心である「平和・対話・創造力」を演劇によって体現しようと、世界のＩＴＩ活動との「連帯と絆」を目指して活動を続けています。

『コモン・グラウンド』　撮影＝保坂萌

『これが戦争だ』　撮影＝石澤知絵子

シリーズ 10 を迎えて

総合プロデューサー（担当理事）林　英樹

日本センター発行の国際演劇年鑑の特集企画として続く「紛争地域から生まれた演劇」シリーズも10年目を迎えることとなった。多くの研究者、翻訳家、演出家、俳優、スタッフ、協力者、支援者の総力の結果の賜物である。また共催者として会場の提供のみならず様々な協力をくださった東京芸術劇場にも感謝したい。

昨年12月に開催された「シリーズ10」では、会場となるギャラリー空間を活かした展示を充実させ、国際演劇年鑑45年の展示、当企画10年間のポスター展示のほか、上演作品に関連する資料展示も工夫をこらし、出版、展示、リーディングとシアタートークによる総合イベントを実現することが出来た。

■社会的分断と対立の激化

この10年、ヨーロッパではポピュリズム、ナショナリズムや移民難民、外国人労働者に対する排斥運動、排外主義が勢いを増し、政治的な対立の深刻化、社会の不穏化が起きている。社会的分断と対立はそれぞれの国内で政治的危機の深刻化を招いている。アメリカの排外主義的なトランプ政権の誕生、ブラジルの極右政権、イギリスのＥＵ離脱、フランスの社会・政治混乱、ドイツにおけるポピュリズムの台頭など、第一次・

紛争地域から生まれた演劇

国際演劇協会日本センター 編　林英樹・曽田修司 責任編集
定価 3,600 円＋税　近刊

シリア、パレスチナ、イランなど世界の「紛争地域」で、なぜ演劇は創られ、どのように演じられているのか。本書により、私たちは未知の紛争について知り、それが自分たちと直接関わりのある出来事であることを発見し驚愕する。欧米、アフリカ、そしてアジアの各地で。本書は、世界の歴史・文化・宗教・政治が、語り手・演じ手・観客という個人の視点を介して交錯し共鳴する、圧巻の「現代・世界・演劇」探究の書である。

■ひつじ書房の刊行案内や特別セールなどのお知らせは「ひつじメール通信」から配信いたしております。ご希望の方は toiawase@hituzi.co.jp までメールでご連絡ください。

〒112-0011　東京都文京区千石2-1-2大和ビル2F　ひつじ書房
TEL 03-5319-4916　FAX 03-5319-4917
toiawase@hituzi.co.jp　http://www.hituzi.co.jp/

ひつじ書房

私たちは「ビジョンなき戦争の世紀」を生きるのか？

シアタートークで問題提起

第二次世界大戦前夜と共通する下地が生まれつつあると警鐘を鳴らす識者もいる。

紛争や難民問題はある特定の地域の問題ではない、とは本企画の基本態度、主旨であるが、世界的な格差、階層の分化と対立、衝突、貧困問題と先進国での政治的・社会的対立、衝突はいまや一体化して考えるべきである。長く紛争問題や海外の貧困問題の「蚊帳の外」にあった日本も、今年4月には外国人労働者の大幅な受け入れに舵を切る。実質的な移民政策が本格化し、「単一民族」的な同質社会から多文化主義的、ダイバーシティを求める社会へと大きな変化の渦の中に入ることになる。世界と日本はほぼ同じ方向に向かっていると考えるべきだろう。

■他劇場での再演や単行本化

世界と日本の同時代的な動きに対して演劇はどのように応答することが出来るのか。このテーマを柱にした当シリーズはますます重要な立ち位置を占めるようになってきた。そのことを証明するように昨年は、本企画で紹介してきた戯曲を本公演として上演する「世界最前線の演劇」シリーズが、当センターの企画協力により彩の国さいたま芸術劇場でスタートした。その第一弾『ジハード』はSNSで反響が大きく広がり、連日超満員となり当日席を求める列が出来た。

また、同作品の翻訳者である田ノ口誠悟氏は、同公演の成果を踏まえ、第11回小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞された。出版では、ひつじ書房からの申し出により、「紛争×演劇」10年の成果として、当シリーズの単行本が本年2月に出版される。本書にはこれまでシリーズで紹介された戯曲3作と、作家、演出家、翻訳者、本企画アドバイザリーメンバー等による論稿が掲載される。

■全公演チケット即完売

今回のシリーズ10は二度目の紹介となるヤエル・ロネン作、ボスニア内戦の加害と被害の関係を題材にした『コモン・グラウンド』、ハナ・モスコビッチ作による、カナダ軍のアフガニスタン派遣を題材にした『これが戦争だ』が紹介された。本企画への関心の高さを示すかのようにチケットは前売り開始とほぼ同時に完売した。

内容や詳細は年鑑や戯曲集に譲りたいが、2作品に共通するのは過去に起きた重要な歴史的出来事をもとに、そこで人々が受苦した辛い体験を、物語を通して再現（演劇行為）することにより、次の世代に語り継ごうとする意志である。普遍性を備えた演劇作品として再現することにより、演劇が過去と現在を強く結びつける。同時に私たちがどこに立ち、どこに向かうべきかを考えさせる。演劇の存在根拠と原点を再認識する場でもあることを思い起こさせてくれる。

『これが戦争だ』のシアタートークで、パネリストとして登壇された防衛大学教授の広瀬佳一氏は、「平和維持活動」として派遣されたカナダ軍兵士が、戦場で受けた過酷なトラウマに関してコメントされた。日本もすでに自衛隊は戦地に派遣されている以上、決して他人事とは言えない。また、演劇批評家の鴻英良氏はシアタートークの冒頭で、「20世紀は大きな戦争、第一次・第二次世界大戦があり、戦争と革命の世紀と言える。それに対し20世紀後半から21世紀はビジョンなき戦争の世紀」と問題提起された。

私たちは「ビジョンなき戦争の世紀」を生きていくことになるのか？　もし、そうであるなら、その時、演劇は何をすることが出来るのか？

「紛争地域から生まれた演劇」はこの問いかけと向き合いながら演劇の意味と役割を考え続ける場となっていくだろう。

（ITI日本センター理事、演出家）

紛争や難民問題はある特定の地域の問題ではない
世界的な格差、階層の分化と対立、衝突、貧困問題と
先進国での政治的・社会的対立は一体化して考える時が来た

ITI日本センター平成三十年度定時社員総会報告

ITI日本センターは、平成30年度の定時社員総会において、平成29年度の計算書類・事業報告の承認を行いました。

日時　平成30年6月24日（日）10時5分～11時43分

場所　松竹株式会社　大会議室（東劇ビル10階）

会員現在数　214名（平成30年5月26日理事会開催時）

出席者　119名（委任状88名）

出席会員　31名（安宅りさ子、安孫子　正、伊藤　洋、小田切洋子、オンパロスダンスプロジェクト（居上紗笈）、角本　敦、糟谷治男、加納豊美、河内美穂、後藤絢子、小林弘文、小牧　游、佐川大輔、真藤美一、曽田修司、高萩　宏、高橋幸夫、としま未来文化財団（岸　正人）、永井多恵子、中村（壱岐）照美、中山夏織、林　英樹、菱沼彬晁、松田和彦、三輪えり花、宗重博之、村井華代、吉岩正晴、和崎信哉、渡辺克己、鰐淵恵美）

配布資料　平成30年度定時総会議案書（平成29年度貸借対照表、同正味財産増減計算書、平成30年度事業計画書）、補足資料（平成30年度正味財産増減予算書）、参考資料（各種チラシ）

開会　10時5分に開会。会長永井多恵子の挨拶の後、定款第十五条に基づき、議長に永井多恵子を選び、直ちに議事に入りました。

定足数の確認　本定時総会は、会員現在数214名の過半数にあたる108名の出席が必要ですが、委任状を含めた出席者数がこれに達したため、総会は有効に成立しました。

決議事項

［第一号議案］第五期（平成29年4月1日～平成30年3月31日）計算書類の承認

審議に先立ち、議案書の「平成29年度事業報告書」に基づいて報告を行い、続いて第一号議案の審議に移り、定款第12条に定める社員総会の決議事項に関わる貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び監事による監査報告書の内容について討議した結果、全員異議なく、承認されました。

報告事項　平成30年度事業計画について

事務局より平成30年度事業計画について現状での経過報告を行いました。主に、5月にアーツカウンシル東京より新たに受託することとなった「アジア舞台芸術人材育成部門」（APAE）と、この委託業務に伴う収支見込についての報告がなされました。

その後の質疑では、インターナショナル・ダンス・デイの催しについての提言と、戯曲翻訳部会の詳細についての質問がありました。

以上により、総会はすべての議案の議決を終了し、11時43分に散会しました。

議事録をご要望の方は、事務局までお問合せください。

ITI「戯曲翻訳部会」が発足

2018年12月18日(火)、東京・東中野のハーフムーンシアターカンパニーのオフィスで、第1回ITI「戯曲翻訳部会」が開かれ、会の発足を祝す乾杯をするとともに、今後の活動についての展望を話し合いました。参加志望者は20名。英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語の4カ国語をカバーしています。

出席者は、呼びかけ人の青柳敦子（演出家）、伊藤洋理事（フランス演劇）、菱沼彬晁理事（中国文学・演劇）、吉岩正晴理事（イギリス演劇）のほか、石川麻衣（アイルランド演劇）、久保寺淳（俳優、翻訳＝英・中）、川口啓史（俳優・演出家）、後藤絢子（主にドイツ演劇）、後藤祥子（俳優）、中山夏織（イギリス演劇）、林英樹（演出家）、三輪えり花（イギリス演劇）、吉原豊司（カナダ演劇）の13名でした。

参加表明者のうち、石井あつこ（英語翻訳）、一谷真由美（俳優）、入江友麻（英語翻訳）、新見真琴（演出家）、庭山由佳（ドイツ演劇）、田尻陽一（スペイン演劇）、山下裕子（俳優）は都合により欠席しました。

まず、呼びかけ人の一人吉岩から立ち上げの経緯についての説明と、「任意の部会」として活動する案が事業委員会と理事会で承認も得たとの報告があり、ついで会の運営委員に青柳敦子を選出しました。

青柳敦子からデジタル図書館構想について「演劇シーンを活性化するには、まず必要なのが作品情報だが、翻訳戯曲の情報はほとんど埋もれてしまう。誰でも自分たちにぴったりの戯曲に辿り着けるようなサイトの検索システムを作りたい」との説明があり、アメリカのPlay-scriptsという検索フォームが紹介された。「上演権と上演料の管理も行なっていて、上演のための申請手続きがサイト内のフォームで出来るが、戯曲翻訳部会が翻訳作品を日本で販売するためには「出版権」というハードルがある。まずは、戯曲の存在を知らせるだけでも有益だと考える」との提案がなされ、また、将来的には翻訳された日本語戯曲の海外への紹介も展開したい等々も提案されました。

デジタル図書館の方向性を中心に今後の展開について話し合われる中で、「近年、上演許可を申請せず、翻訳者の名前を記載せずに上演する団体が見受けられたりする。啓蒙活動も必要だ」。「翻訳のクオリティによって、原作よりも作品の評価が高まることもある。翻訳者の〝表現者〟としての地位の確立が必要だ」等々、戯曲翻訳をめぐる現状の問題点の提示がなされました。お互いの「問題意識」や「課題」を共有する充実した発足会議だったと思います。

（報告＝副会長・吉岩正晴）

英連邦部会報告

ITI英連邦部会の昨年の活動は月1回の例会のほか、2月25日に新宿・無何有（むかう）で、翻訳講座優秀作品に選ばれた『シンデレラ・シンデレラ』を発表、7月14日に同じく無何有にて「戯曲研究＆懇親会」を行い、ノエル・カワードの『夕日の影』を取り上げました。

第2回翻訳講座優秀修了者翻訳作品発表会

スティーブ＆ケイシー・ホッチナー＝作、yuma＝訳、三輪えり花＝演出の観客参加型演劇『シンデレラ・シンデレラ』をリーディング発表しました。

出演はLutherヒロシ市村、後藤祥子、品川恵子、鈴木美紗、辰巳次郎、三輪えり花、山下裕子、yuma。

リーディングとはいえ、衣装や小道具にも凝っていて見た目も華やか。今回も4～5人いた4歳～10歳の子供たちの反応が素晴らしくよく、素直に積極的に参加してくれた。前回の観客参加型演劇『ドロシーとオズの魔法使い』の時と同様、子供たちに触発されてか（？）大人たちもみんな参加してくれたのが、今回も収穫。この種の参加型演劇、もっと広まってくれるといいと思います。

第9回「戯曲研究＆懇親会」

ノエル・カワード＝作　吉岩正晴＝訳　川口啓史＝演出の『夕日の影』を取り上げました。

リーディング出演は、吉田直子、山下裕子、川口啓史、救仁郷将志。

『夕日の影』（1966年）はカワードが最後に書いた『三つのスイートルームで』と題する三部作の一つで、死と直面した時、人はどう生きるべきかを問う、カワードには珍しい重い主題を提示するシリアスな人生劇です。

（報告＝副会長・吉岩正晴）

会員消息 （2018年2月～2019年1月）事務局調べ・順不同・敬称略

【個人会員入会】（所属／ジャンルなど）
坂田ゆかり（フリーランス／演出家）
入江友麻（フリーランス／翻訳）
小田島創志（東京大学大学院／現代イギリス演劇）
渡邉宰希（株式会社グスタフ／俳優）
滝口健（世田谷パブリックシアター／演劇）
柳田利枝（フリーランス／翻訳）
中立公平（有限会社PHI代表取締役・一般社団法人フェスティバーロ代表理事・一般社団法人KIO芸術監督／劇作・演出・俳優・作曲・プロデューサー・飲食店オーナー）
生田みゆき（劇団文学座／演出家）
【団体会員入会】
Real Heaven 代表 佐藤武（舞台制作）
【個人会員退会】
秋葉ヨリエ
峯岸綾子
【賛助会員退会】
一般社団法人日本ケーブルテレビ連盟
【ご逝去】
千賀ゆうこ（平成三十年九月九日）
花柳寿南海（平成三十年九月十一日）
藤田洋（平成三十年九月二十八日）
【叙勲・功労者】
文化功労者 池辺晋一郎
第73回文化庁芸術祭賞 演劇部門優秀賞 野村萬斎
同 テレビ・ドキュメンタリー部門大賞 日本放送協会／優秀賞 株式会社WOWOW
第25回読売演劇大賞 芸術栄誉賞 仲代達矢
第39回松尾芸能賞 大賞 坂東玉三郎
第11回小田島雄志・翻訳戯曲賞 特別賞 Kawai Project（代表・河合祥一郎）

ITI日本センターは個人、団体会員を募集中

ITI国際演劇協会日本センターでは、舞台芸術・放送芸術を通した国際交流に関心をお持ちの個人・団体の会員を随時募集しています。

会員には『国際演劇年鑑』などセンター発行の出版物が無料で配布され、センター主催・共催のワークショップやシンポジウムなどに割引料金で参加できます。

▽個人会員 入会金6、000円 年会費12、000円
▽団体会員 入会金6、000円 年会費18、000円
▽賛助会員 入会金なし 年会費18、000円～100、000円（一口）

入会金免除 ただ今ご入会の方は、入会金免除となります。協会の活動をご喧伝いただき、会員の新規入会にご協力ください。

寄付のお願い 当センターは、「公益社団法人」への移行にともない、寄付金控除など税法上の優遇措置の対象となる特定公益増進法人となりました。個人の場合は、特定寄付金として一定金額まで寄付金控除が認められ、法人の場合は、一般の寄付金の損金算入限度額とは別に、別枠の損金算入限度額が設けられています。詳細は事務局までお問い合わせを。ホームページにも掲載しています。

編集後記

▲ITI創立70周年記念大会の盛況の報に続き、1月には三輪えり花理事が「アラブ演劇祭」（カイロ）に参加しました。当センターが17年度に招聘した劇作家ガンナーム・ガンナーム氏から参加を要請されていたものです。今後の現地報告にご期待ください。（曽田）▲長い抑圧と迫害に耐えたウガンダセンターのジェシカ・アトウォーキ・カーフワ会長は、ITI70周年の式典に「演劇が芸術であると同時に世界平和の守り手であることを訴え続けてきたITI万歳（Long Live）！、演劇の絆万歳！、人間万歳！」とメッセージを寄せました。この三つの万歳にこめられた思いをずっと考えています。（菱沼）

（© 国際演劇協会日本センター 2019）

I.T.I. 第130号
2019年1月31日発行
発行 公益社団法人国際演劇協会日本センター
発行人 永井多恵子
編集人 曽田修司 吉岩正晴 菱沼彬晁
住所 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1国立能楽堂内
Tel03-3478-2189 Fax03-3478-7218
Email:mail@iti-j.org
URL http://iti-japan.or.jp

「王位、権力の座は変わることなく、人はその上を移ろい、滅びの道を通り過ぎてゆく」

英国オリンピック年、ロンドン・グローブ座で初演

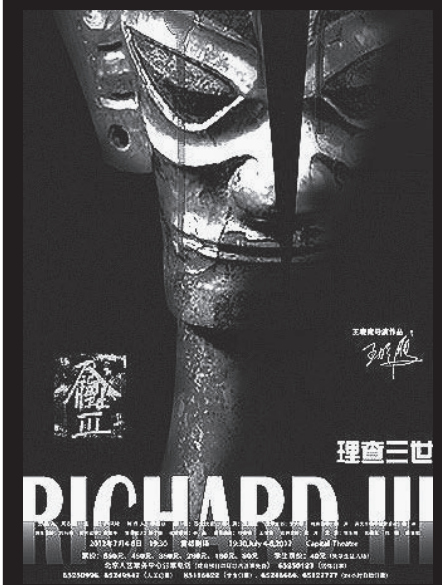
中国現代演劇の旗手
演出家
王暁鷹おう ぎょうよう

「我就是演員」準優勝
バッキンガム侯爵
涂松岩と しょうがん

〈東アジア文化都市関連事業〉

中国国家話劇院『リチャード三世』

4月 東京芸術劇場 プレイハウス



『リチャード三世』北京公演のポスターから

国家芸術院・優秀俳優賞
リチャード三世
張皓越ちょう こうえつ

中国国家京劇院の名花
アン夫人／エドワード王子／魔女の３役
張鑫ちょう きん

ここが見どころ 悲劇によく似合う　京劇の技法と象徴表現

王暁鷹初演出のシェイクスピア

シェイクスピアが京劇に出会ったら……中国現代演劇のトップランナー・王暁鷹が初めて演出したシェイクスピアの舞台を、中国の演劇評論家はベルトルト・ブレヒトと梅蘭芳（メイランファン）の劇的な出会いに喩えています。

リチャード三世は〝不具者〟として登場しません。刺客の血塗られた赤い手袋をリチャードが自らの手にはめたとき、突然彼の背中に瘤（こぶ）が現れ、奇怪な跛行（はこう）を始めます。この京劇ならではの象徴表現がロンドンの観客を驚かせました。この驚きはブレヒトが梅蘭芳の演技に見出した「異化効果」の可能性に通じるとその評論家は語ります。

アン夫人はシェイクスピアの台詞を京劇の流麗な詩的抑揚に乗せ、繊細優美な指の演技で心理表現を深めます。丁々発止、リチャードと渡り合う鬼気迫るシーンです。いわゆるリアリズム演劇の定番化した「真実らしさ」をブレヒト流に断ち切って見せました。その女優が今度はエドワード王子（りんず）に変身して再登場。頭には翎子と呼ばれる雉の尾羽、手には馬の鞭の白い羽根、打って変わってあどけない可愛いさです。観客は異次元の世界へと誘い込まれます。

しかし、この舞台は単にシェイクスピアを京劇風にアレンジしたといった翻案劇ではなく、現代劇として原作の台詞に忠実な、骨太い翻訳劇です。京劇は悲劇に似つかわしい表現世界を持つことを王暁鷹は示したのではないでしょうか。（文＝理事・菱沼彬晁）

① 2019 年 4 月 5 日（金）19 時開演② 4 月 6 日（土）15 時開演③ 4 月 7 日（日）15 時開演
ポストパフォーマンストーク　6 日終演後に王暁鷹、張皓越、張鑫らが登壇（司会・飯塚容、通訳・福井官奈）

ＩＴＩ日本センターが共催　会員はＳ席 7,000 円を 4,000 円でご優待　締切り 3 月 31 日（日）
申し込みはＩＴＩ日本センター　Tel03-3478-2189 Fax03-3478-7218　Email:mail@iti-j.org

主催：豊島区、東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、公益社団法人 ITI 国際演劇協会日本センター、一般社団法人国際協力交流センター　後援：中国大使館　協力：日中演劇交流話劇人社